

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

日本北部周辺の先住民族資料の理解のために：
共同研究：

明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動—国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討
(2012-2015)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/5828 |

共同研究 ● 明治から終戦までの北海道・樺太・千島における人類学・民族学研究と収集活動
—国立民族学博物館所蔵のアイヌ、ウイльта、ニヴフ資料の再検討 (2012-2015)

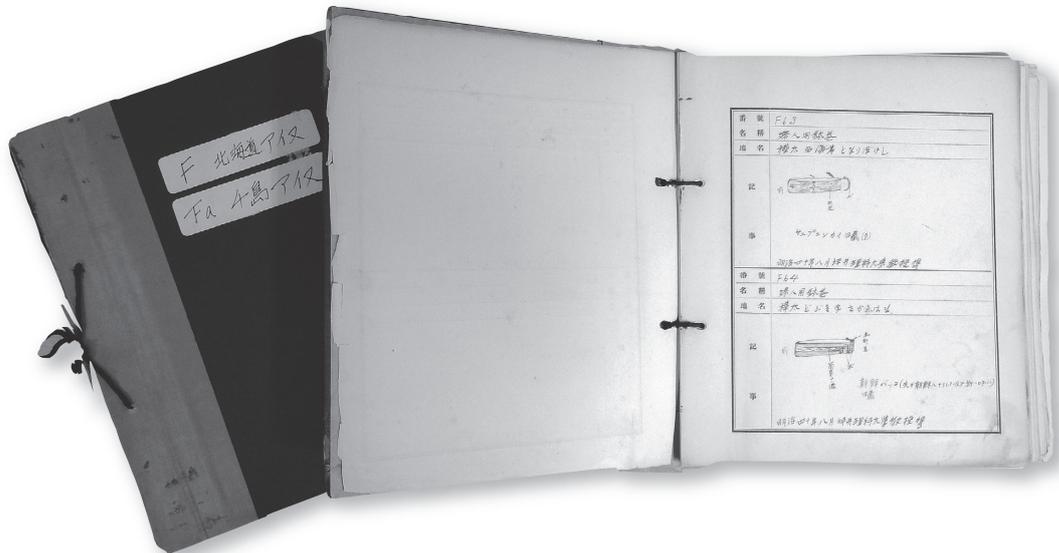
国立民族学博物館（民博）には、設立の1974年よりはるか以前に収集された民族資料のコレクションが引き継がれている。筆者が研究の対象としている日本列島北部周辺（本研究では北海道・樺太・千島）の場合、アイヌの資料は全収蔵数4000点以上のうち、第二次世界大戦終戦までに収集されたのは1000点以上、同じくウイльтаは約550点のうち280点以上、ニヴフは約230点のうち70点以上と推定される。これらは現在では収集できない貴重なものを多数含み、伝統的な素材や技法によってつくられているため、物質文化の研究を進めるうえできわめて重要である。

しかし、民博の標本資料データベースには、残念ながら未入力の情報や誤りがあり、そのまま利用できないものが少なくない。そこで、民博が所蔵する日本列島北部周辺の先住民の標本資料のうち、古い時期にあたる明治から終戦までに収集されたものを再検討するための共同研究を、2012年10月からスタートさせたところである。

研究の第1の目的は、資料に関する情報を追加・修正して、より正確なものにすることにある。しかし、それだけにとどまらず、人類学または民族学者と被調査者・資料提供者との関係をはじめ、資料が集められた当時の研究状況と社会的な背景をも明らかにしたいと考えている。

対象とする時代を明治からとしたのは、もっとも古い資料がその時期に収集されたからだが、人類学（民族学）の黎明期に日本列島の北部で隣接してくらす異民族にむけられた研究者らの視線を検証するためでもある。また、第二次世界大戦終戦をひとつの区切りとしたのは、樺太・千島はソ連の支配下となり、戦後は日本人による同地での調査研究および収集活動が途絶えたからである。ただし、一連のコレクションとして、また日本民族学会の動向をとらえるために、日本民族学会附属民族学博物館の旧蔵資料は、その活動を終える1962年までも対象とすることにした。

なお、樺太の民族のうち、日本の戸籍がつくられていたアイヌは多くが戦後北海道に移住したが、ウイльтаやニヴフは一部の家族らが北海道に移住したほかはサハリンに残る者も多く、戦後補償はなかった。



東京大学旧蔵資料のうち北海道、千島、樺太の目録。

民博コレクションの背景

これまでたびたび紹介されてきたことではあるが、資料の民博への収蔵までの経緯について、振り返っておきたい。

民博の資料の柱となっているもののひとつは、坪井正一郎が初代教授となった東京大学理学部人類学教室の旧蔵資料である。時代が確かなところでは、古くは明治30年代から、大部分は戦前までに収集された。東大旧蔵の資料数は、6000点を超えており、うち筆者らが対象としている北海道・樺太・千島の先住民関係資料は、およそ1000点を占める。

もうひとつは、渋沢敬三が中心となり大正時代に玩具や縁起物などの収集から始められた「アチック・ミュージアム」を基礎とする資料群である。1937年に東京の保谷（現在の西東京市）に着工した日本民族学会の研究所と博物館には、手狭になっていたアチック・ミュージアムの資料が、研究スタッフとともに引き継がれることになった。1939年に日本民族学会附属民族学博物館として正式に開館し、さらに収集は続けられた。戦中と戦後しばらくは活動が停滞したが、1950年頃から活発に調査収集活動がおこなわれ、資料数は急激に増えた。しかし、同館も老朽化して資料の保存が困難になったため、1962年に文部省史料館の収蔵庫の完成を待ち、将来、国立の民族学博物館が創設された場合はそこへ移管するようにとの要望を添えて、すべての資料が文部省史料館に移された。その数は2万点以上であり、未整理のものを含めるとさらに数は増えることになる。このうち北海道、樺太、千島の資料は、約800点と推定される。

データの見直しと追加・修正の可能性

民博が開館する前に収集されたこれら資料の大部分には、十分とはいえないものの、資料の台帳やカードがあり、番号、

資料名、収集地、収集者、収集年月および備考などの記載欄がある。東大資料の目録は、未記載の欄もかなりあるが、アチック・ミュージアムおよび附属民族学博物館資料は、比較的記載が充実している。ただ、当時の調査・収集時の誤解・誤認や資料管理の限界、また、数度の管理替えによる情報の紛失、転記・入力時のミスなどにより、現在の民博のデータベースは、情報の欠落や誤りが生じてしまっている。そのため、データベースを見るだけでは不十分で、資料の管理カードや実物をあたり、それでも判明しない場合は、関連文献等を探さなければならない。

しかし、収集者が明らかなものが多いので、その足跡をたどることによって、情報が修正・追加できる可能性は十分にあり、たとえば、『東京人類学雑誌』『民族学研究』『東京人類学会日本民族学会連合大会記事』などに掲載された調査報告をはじめ、当時の新聞や雑誌、また近年になって発見あるいは公開されるようになった研究者の日記やフィールドノートなどから、詳細な情報が判明するケースも少なくないと考えられる。

2012年度の研究会

初年度の研究会では、所蔵資料の概略を把握することから始め、収集をおこなった主な人物の研究歴や動向などを見ていくことにした。

まず、東京大学理学部人類学教室旧蔵資料に関する目録や出版物の情報と現在のデータベースの比較に着手した。研究メンバーの一人、北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園の加藤克は、東大旧蔵資料について、民博のデータベースと、東大で作成した資料の原簿である『土俗品目録』と、『内外土俗品図集』（長谷部言人監修・東京人類学会編纂／1938-39年 寶雲舎）の情報を整理・統合し、ひと目で比較できるデータベース案を作成した。これにより、民博のデータベースに欠けている情報が明らかになった。

東大旧蔵資料には『土俗品目録』と『内外土俗品図集』のほかに、1950年代後半に当時の学生に作成させたとと思われるカードもあるので、2013年度はこれらの整理統合を進めたいと考えている。

2013年1月には民博の収蔵庫で、東大旧蔵資料と日本民族学会附属民族学博物館旧蔵資料の一部を実見した。資料に直に書かれた情報や、貼付された紙などに書かれた情報があるにもかかわらず、一部はデータベースに反映されていないことも確認した。これらもデータベースに付与していく必要がある。

収集者に関しては、明治～昭和初期にかけて樺太での調査

と収集を重ね、ノートや日記などの関連資料が残る石田収蔵について、板橋区立郷土資料館の小西雅徳が発表した。また、岡正雄とともに1937-38年に樺太などで約170点の民具を収集した馬場脩について、函館市博物館の大矢京右を特別講師に招き、研究歴や調査の足跡などについて発表してもらった。

さらに、2月には民博の収蔵品を中心とした特別陳列「鳥居龍蔵とアイヌ—北方へのまなざし—」を開催中の徳島県立鳥居龍蔵記念博物館を会場に研究会を開いた。ノート類の一部などを実見するとともに、鳥居龍蔵の千島と樺太での研究成果や調査収集の背景と足取りについて、北海学園大学の手塚薫と北海道開拓記念館の田村将人が発表した。これらに基づいて議論をおこない、今後の課題を検討した。

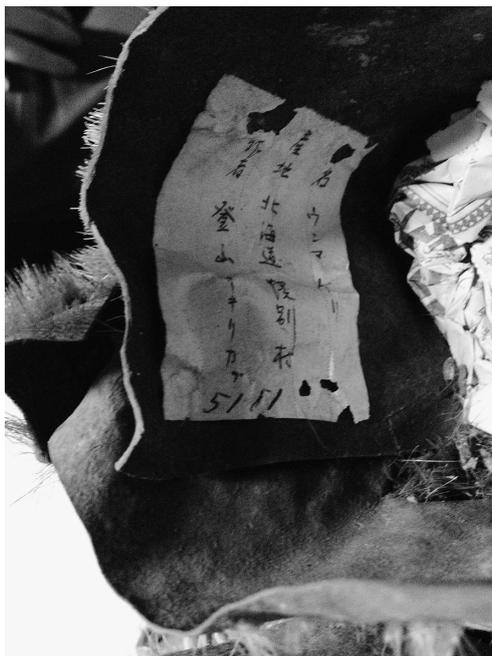


毛皮製靴。アイヌ語の学者である知里真志保が収集し、1936年にアチック・ミュージアムに収めたもの（1975年 民博収蔵 H0018706）。

先住民と研究者の関係

本研究では、資料の情報を正確なものに置き換えてゆくばかりではなく、収集の状況等とおして、先住民と研究者の関係も明らかにしたいと考えている。ひいては当時の人類学・民族学の潮流や、日本国家と日本社会がアイヌやウイルタ、ニヴフといった列島北部周辺の民族をどのように見ていたかも探っていきたい。

たとえば、馬場脩の手記には収集時の状況を詳しく書いたものがある。生活の変化で不要になったからと簡単に譲ってもらえた民具もあれば、お金のために不本意ながら着物や儀礼具を手放す事例もあり、また、移住によって無人になった集落の倉から無断で持ち出されたものまで、さまざまである。そのときの所有者の事情や、収集者の心情なども、資料の背景として重要な情報であると考えられる。どのような意図で何が収集されたかを丁寧に追っていくことで、研究者らの先住民への視線が明らかになるだろう。



靴の内側。靴に詰められた1935年の古新聞をそっと抜くと、シールが貼られていた。品名に「ウンマケリ」とあり、馬の皮でつくられた靴であることや、製作者の名前も書かれていた。

さいとう れいこ

民族文化研究部・助教。専門は世界の北方地域先住民の文化人類学。アイヌ民族をはじめアラスカやカナダの先住民の物質文化および工芸・観光について比較研究をおこなっている。著作に「極北地域における毛皮革の利用と技術」（北海道立北方民族博物館編『環北太平洋の環境と文化』北海道大学出版会 2006年）、大村敬一・岸上伸啓と共編『極北と森林の記憶 アイヌイットと北西海岸インディアンの版画』（昭和堂 2010年）など。